

掲示板

生かされて  
生きる命を  
大切に

吉良町妙隆寺掲示板より



赤羽別院報 第9号

発行所  
真宗大谷派 赤羽別院 親宣寺  
発行人 野々山 洪美  
愛知県幡豆郡一色町赤羽上郷中14  
Tel.Fax. (0563)72-2308  
印刷/(株)教育広報センター

シリーズ

人間模様

⑨

碧南市東浦町 山中寛三さん

八十三歳の今も現役医師として診療に従事される山中寛三さんは、手次寺の責任役員も務め、寺の運営・教化活動にも精力を注がれている。また、戦時下で軍医として水上特攻隊に参加して多くの「死」にも直面された。幾多の経験と現在の心境を熱く語っていただいた。

山中 三年前ですけど、住職交代の時に「今のままでは寺の将来はないし、消滅するだけだ。もっと真剣に考えなさい」と新住職に忠告したことがあります。— 厳しいご意見ですが。

山中 寺は住職のものではない。我々が生きていく上で必要な場所ですよ。住職は片手間で務まる仕事ではありません。他の寺のことは知りませんが、葬式だけの寺では存在価値はないと総代として苦言を呈したのです。— 総代になられた経緯は。



山中 父親が務めていた関係で引き継ぎました。「白道会」という法座に大河内了悟先生をお招きして、ご縁を頂いたのもその頃ですね。先生には地獄極楽のこと、がん告知の問題等について真剣にお尋ねしたりして、随分お育てを頂きました。— 戦地での体験談をお聞きしたいのですが。

山中 戦争は実に悲惨なものです。毎日が死の恐怖で震えています。毎日の間に慣れかかると、いつの間にか慣れてしまふ。麻痺してしまう感覚は何とも不思議です。お国のため、家族のためという当時の教育が怖さを忘れさせたのかも知れませんね。— 医師として死というものをどう捉えてみますか。

山中 世の中に絶対というところはないが、生きている以上、死ぬことは絶対間違いない。その約八十%が病院で亡くなっています。残念ながら家で家族が看取るケースは少ないですね。— ですから死を肌身で感じる

山中 父親が務めていた関係で引き継ぎました。「白道会」という法座に大河内了悟先生をお招きして、ご縁を頂いたのもその頃ですね。先生には地獄極楽のこと、がん告知の問題等について真剣にお尋ねしたりして、随分お育てを頂きました。— 戦地での体験談をお聞きしたいのですが。

山中 戦争は実に悲惨なものです。毎日が死の恐怖で震えています。毎日の間に慣れかかると、いつの間にか慣れてしまふ。麻痺してしまう感覚は何とも不思議です。お国のため、家族のためという当時の教育が怖さを忘れさせたのかも知れませんね。— 医師として死というものをどう捉えてみますか。

山中 世の中に絶対というところはないが、生きている以上、死ぬことは絶対間違いない。その約八十%が病院で亡くなっています。残念ながら家で家族が看取るケースは少ないですね。— ですから死を肌身で感じる

蓮如絵伝を読む(9)

碧南 青木 馨

報恩講には必ず拝読される「大坂建立」の御文は、蓮如上人ご往生の前年明応七年、最後の報恩講を大坂坊舎で勤められた時のものです。ここには「明応第五の秋下旬のころより、かりそめながらこの在所を見初めしより」とあり、翌年の報恩講に坊舎は落成しました。絵伝では、この地に聖徳太子あるいは太子の使の童子が現れ、上人を導き、ここにすでに瓦が地中に埋められている場面が描かれます。坊舎建立が予言されていた。現実には、かつての大坂坊舎たる大坂城の南側に難波宮跡、さらに四天王寺が在り、この地が聖徳太子ゆかりの地であると言つてもあながち荒唐無稽ではないようです。それで御文には



が、それでも足を運んでみえる。— 患者さんと日々接することで感じられることは。山中 智慧、感性を頂くことでしようか。知識は学ばば身に付くものですが、智慧は理屈を超えていますから老若に関係ありません。私の患者にも病気を受け入れて、実に明るく前向きに生きていく人もいます。人が生きていくためには、感性を育てる宗教心や芸術文化が必要です。是非とも寺がその役割を果たして欲しいと念願します。(N・M)

赤色赤光

念願がなつて良寛の終焉の地(生れ故郷)を訪ねた。真宗寺院の一隅に門徒衆と共に眠る墓参りを最後にした。— 僅か一日の出遇いであつた。江戸時代末期にあつて、生きるに最低の草庵(鬼小屋とも称される)で、ひっそりと半生を過ごし、下痢と腹痛で喘ぎながら野垂れ死のような最期(七十四歳)を送つた良寛が、今なお日本人に愛され続けているのは何故なのか。良寛を清貧の人と形容することは容易であるが、良寛の主体が見えてこない。良寛こそ自然・他力に生きた人と見たら如何なものか。肩書を嫌い、判子も押さない。誇るものは何も持たない。ありのままの自分を曝け出して、それでいてとつともなくおおらかに生きた。良寛は詠う「生涯身を立つるに懶く、騰々として天真に任す」と。親に背いてまでわが思いを通してきた生き方が、どれほどのものであつたのか。今となれば、恥ずかしくさえ思う。だから騰々として自然法爾に生きるというのである。全く気負いを感じさせない生き様が、比較と競争に明け暮れる現代人の魂をくすぐるのかもしれない。基本的な生活水準以上の生活力を身につけた現代人が、今後直面する問題は、過剰なものをどう処理するかという問題かもしれない。しかしこれでは浪費のすすめである。豊かさの果ては一体何があるのだろうか(〇)

# ゴボちゃん



## ウオッチング

## お荘厳

## クローズアップ

### お荘厳(おかざり)について

お内仏(お仏壇)をおかざりする仏具は三具足と呼ばれ、如来さまのはたらきを表わしています。燭台のローソクは闇を照らし、花瓶の花はいのちの尊さ、香炉の線香は清らかな世界である浄土をそれぞれ表現しています。平常のお供えはお仏飯ですが、時に菓子、果物などをお供えするには、お内仏の外に別の台をもうけてお供えます。また、報恩講、年回法要などの仏事には打敷を掛け、お華束(餅)をお供えます。

昔から「信は荘厳から」と言

って尊前をきちんとおかざりすることは



真宗門徒の勤めです。いつも気持ちよくお勤めができるように、掃除やおみがきは丹念に心掛けたいものです。(M)

### 「掃除」と「初心」

僧侶として、各家々のお内仏にお参りさせて頂き思うことは、きれいに掃除がされてあるお仏壇は、その家のお内仏(ご本尊)

に対する心映え(誠意)が感じられ、嬉しくて心地よい。私自身、僧侶の仕事をし始めた頃は本堂の掃除をよくやったものだ。また実際そういう時間

がもてた。そうして本堂・ご本尊の周辺を掃除し、手をかけることは、自身の置かれた立場に

対する責任感のようなものが芽生え有意義に感じられた。ただ

徐々に仕事が増えてくるにつれ

今度は、掃除のような、その時

大切に思えたごく基本的な仕事

が、自分の都合で後回しになっ

てしまう。

気持ちの籠り、行き届いたお

内仏の前に座る時、面倒な事と

手を抜きたがる私自身の愚かさ

に改めて気づかされる。そして、

つい忘れがち大切な事(初心)

を思い起こさせてくれる。(N)

一色町に住む都築たつさん(九十七歳)は一人暮らし。今でも毎朝のお仏飯は自分であげている。正月や彼岸、命日、お盆の前になると娘の礼子さん(七十

二歳)和子さん(六十歳)が寄ってきておみがきをする。礼子さんと和子さんにおみがきを教えたのは、

たつさんの母親しきさん。しきさんはとても仏様を大切にす

方だったそうで、朝晩のお勤め、御文は欠かさなかった。

戦後の昭和二十一年に引き揚

げてきてからは、家族全員でお

みがき。

流れ作業で役割を分担し、

仕上げは決ま

った

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

### お勤めは練習が大切

(H)

毎年夏休みに入ると西尾市厳

西寺の境内には、元気な子供達

のお勤めの声が響く。今年も七

月二十日(土)・二十六日(金)

六時三十分に行われた上・下今

川町子供会主催「ラジオ体操」

の後で、引続いて藤原肇住職の

指導により「おつとめのけいこ」

が行われた。約四十名の子供達

に数名の大人も交えて、元気に

正信偈・同朋奉讃のお勤めの稽

古がされた。

また八月十二日(月)・十六

日(金)には戦争や地震、昔の

今川の人々の暮らしを子供たち

に知っ

て貰お

うと「

今川の

昔」展

が行わ

れた。

戦時中

に供出

された

梵鐘の

代用と



### おあさじの実践を

(N)

赤羽別院で毎朝七時から勤ま

る晨朝勤行(おあさじ)には十

数人の方が欠かさず参加される。

この方たちは、別院の五大法要

の前には、お御堂の掃除や仏具

のお磨きもしてくださる。

なお、

毎月十

三日・

二十八

日には

晨朝法

話があ

ります。

是非

一度別

院のお

あさじ

に参加

してみ

て下さ

い。



### 赤羽別院紹介

●副輪番人事(七月一日付)

◆新任 光明寺住職 永谷在

◇退任 良宣寺前任住職 伴知成

●責任役員人事(七月一日付)

◆新任 養林寺住職 東脇芳幸

◇退任 永谷在

赤羽別院真宗講座

講師 名古屋市 野田 風雪師

内容 正信偈に学ぶ

会費 四千元(年間十一回分)

時間 午後一時三十分から

期日 初回9月13日以降10月8日、

11月7日、12月13日

以降7月まで毎月一回

申込 当日受付で承ります

●「赤羽御坊」協賛者芳名

前号披露分以降

▼西尾市願海

寺▼朝岡俊文、朝岡繁広、朝岡

一男、中根美喜子、朝岡直一、

近藤浩、志賀康弘、藤浦高明、

杉浦政美、本多幹一郎、朝岡春

治▼坂部津多子▼豊田市浄覚寺

▼西山定子▼吉良町良興寺▼花

蔵寺町同行中▼第十一組門徒会

▼西尾市了願寺▼吉良町正向寺

▼安城市本龍寺▼伴知成▼西尾

市上矢田浄徳寺▼西尾市正念寺

▼西尾市光明寺▼西尾市随縁寺

▼西尾市厳西寺及び同行

●編集後記

久しぶりの「赤羽御坊」にな

りました▼次号から紙面もスタ

ッフも一新してお届けします▼

是非ご期待下さい(〇)

### 「赤羽御坊」発行の

協賛志を募集

しています。

して